

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

無料

ご自由にお持ち  
帰り下さい

# 沖縄協会だより

2026.1

No.38



吉村明峰 作

## 光の詩 号数：M100

吉村明峰 大正10年愛知県生

画歴：立教大学卒。立軌会招待出品、現代洋画精鋭選抜展入選。

制作意図：私は、画面の奥に永遠の光を追求しております。光は未来への象徴であり、平和への祈願でもあるからです。

額サイズ：縦×横×厚【114×179×7.5cm】

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会

# 第47回 沖縄研究奨励賞受賞者決定

沖縄協会では、沖縄の地域振興、学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、昭和54年(1979年)から沖縄研究奨励賞を設け、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学・人文科学・社会科学)を行っている50歳以下の新進研究者又はグループに対し、その年ごとに3件以内に贈呈している。本年度で第47回を重ね、全国から10件の推薦応募が寄せられ、選考委員会(牧野浩隆委員長)において厳正・慎重な選考を重ねた結果、受賞者を3件に決定した。

## 自然科学部門



下瀬 環 (しもせ・たまき)

### 〈研究題目〉

沖縄県における魚類の生態と市場特性および漁業資源管理に関する研究

〈所属〉岩手大学農学部・教授  
〈年齢〉46歳

## 自然科学部門



大野 豪(おおの・すぐる)共同研究代表

### 〈研究題目〉

「美ら島・美ら海をまもる農業」をめざして  
:害虫管理と生物多様性保全の両立の実現に向けた研究

〈所属〉沖縄県農業研究センター石垣支所・  
上席主任研究員  
〈年齢〉50歳  
〈構成員〉他2名

## 人文科学部門



金 閻愛 (キム・ウネ)

### 〈研究題目〉

演劇集団「創造」と沖縄の演劇文化

〈所属〉東京外国語大学・非常勤講師  
〈年齢〉50歳

※年齢は2025年7月15日応募時

## 沖縄県における魚類の生態と市場特性および漁業資源管理に関する研究

### 受賞理由

下瀬 環

下瀬環氏の研究の特色は、沖縄沿岸魚類の生態学研究を基盤としつつ、水揚げされた魚類の市場価値を定量的に評価するところまで論点を広げ、さらに、これらを基に魚類の有効な資源管理まで論ずる点にある。

まず生態学的研究では、県内で重要魚種とされるフエダイ属やフエフキダイ属の魚類を中心に、成長、寿命、繁殖、食性を調べ、月齢周期で産卵する魚種が漁業の観点からは脆弱であることを示した。また、極めて重要な資源であるクロマグロにも月齢周期による産卵活性の変化があることも世界で初めて明らかにした。

次に、漁業者の低所得問題から、水産物の価値向上のための研究を行っている。漁獲量を増やすより高く売れることを目指し、供給量や季節に依存する市場の状況、大きさや傷など個体の質の市場価格への影響を調査した。調査から得られた情報はクロマグロにも適用され、セリ値形成に対する重要な要素を定量的に把握するに至っている。さらに、魚類の成長量、死亡率、成長程度による価値の変化を分析・計算し、漁獲量と将来の利益最大化の関係まで試算している。これらの貴重な研究成果は、生

態研究の情報提供者である地域の漁業者のみならず、漁協関係者、仲卸業者など、市場に出回るまでの現場関係者とも密接に協働・連携することによって成し遂げられたもので、地元水産業への貢献が大きいと言える。

下瀬氏はまた、水産物の価値を高めるには、消費者自身が水産物のことを知るの必要と考え、県産水産物の図鑑を刊行して消費者の啓蒙にも尽力している。この図鑑は水産物の解説のみでなく、関連する水産業や文化にも触れており、内容が高く評価されて沖縄書店大賞を受賞した。

このように、下瀬氏は、魚類の生態研究で成果を上げ、これを水産業という視点から見つめ直し、さらに産業活性化まで見据えた研究を行っている。これらの成果は、現在から将来の水産業のあり方に大きく寄与することが期待され、沖縄研究奨励賞に値する。

【宮城 隼夫 選考委員】

## 「美ら島・美ら海をまもる農業」をめざして:害虫管理と生物多様性保全の両立の実現に向けた研究

大野 豪(共同研究代表)

喜久村智子・貴島圭介

### 受賞理由

農業による自然生態系の破壊は、

当初の予想をはるかに上まわり、年を重ねるごとに加速化し、深刻な問題となつている。農業生産における農薬（化学合成物質）の出現は、かつては救世的とも期待されたが、その弊害が明らかになるにつれ、極めて深刻な問題となり自滅の構造が見え始めている。

1950年代～1980年代は農業振興のため、多量の農薬が使われ海の生態系が著しく損なわれ、磯焼け現象も続出し、かつての多様性はすっかり姿を消したのである。様々な農薬の規制が強化され、農薬の弊害が理解されるにつれ、その汚染度は徐々に減少しつつあるが、「美ら島・美ら海をまもる農業」の実現には、農業における化学物質の使用をすべて止めるという覚悟が必要である。同時に、日常生活や医療に使用される化学物質も無害化するシステムを強化し、総合的に対応せねば目的達成は容易ではない。

量子力学的に見ると、すべてが繋がっており、重ね効果的な影響が現れるため、場所を問わず、散布回数合計によって汚染度が決まるという背景を考えると、原因物質を使用しないという原則が基本である。

このような見地から、本研究の目的や成果は、IPM（総合的病害虫管理）やIBM（総合的生物多様性管理）の理にかなった方向に進んでおり、本質的な解決へと向かっている。このような研究は時間が掛かり根気が必要であるが、それを当然の

ごとく受入れている姿勢は、これからのIPMやIBMを更に充実させるものであり、環境DNAメタバーコーディング等の活用も大いに期待できるものである。

この研究の目標は、不偏的なものであり、自然生態の問題の解決に大きく貢献するものである。

【比嘉 照夫 選考委員】

## 演劇集団「創造」と沖縄の演劇文化

受賞理由

金 閻愛

金閻愛氏の研究は、演劇集団「創造」の活動および代表作となった知念正真作の戯曲『人類館』の上演活動を戦後沖縄の文化活動史に位置付け、その時代的意義や歴史社会的な位置づけを明らかにしている。金氏は、公演パンフレットや新聞記事、手記など様々な資料を丹念に渉猟し、そこに現れた団員達の声を基に、演目の上演だけでなく、舞台準備に関わるさまざまな活動や組織運営を含めた「創造」の活動実践を変わりゆく沖縄の社会状況の中に位置づけ、多面的に明らかにしている。

金氏の主要な研究「戦後沖縄における文化運動の一考察」の第一部では1961年に劇団が結成される前の1950年代後半から施政権が返還されるまでの米軍占領下の活動を分析している。ここでは「人

類館』以前に上演された旗揚げ公演の「太陽の影」、「朴たちの裁判」、「アネの日記」などを上演した意図や時代的意味、特にアルジェリア独立戦争を題材にした「太陽の影」の公演パンフレットに記された団員たちの声をもとに「創造」の社会的な性格を明らかにしている。

第二部では日本施政権下に移行した時期から『人類館』の宮古八重山離島公演、学校巡回公演、本土公演の行われた1980年代前半までの活動を分析対象にしている。初版と改訂版の違いの分析や登場人物のセリフに使用されるヤマト

グチ、ウチナーヤマトグチ、ウチナーグチが交錯する意味の分析を通して、その三つのことばの持つ歴史社会的な意味を明らかにし、本土／沖縄、差別／被差別という単純な二項対立の枠組みに取まらない沖縄の持つ多面性と複雑さを取り出している。また、離島公演、学校巡回公演、本土公演の分析を通して観る側の声にも焦点を当て、沖縄県内の地域差や世代差、沖縄の外の人の反応の分析を通して『人類館』が問いかけたもの、沖縄の抱える課題の複雑さを改めて明らかにしている。金氏の研究は、戦後沖縄の文化活動史研究に新たな可能性を提示している。

【狩俣 繁久 選考委員】

## 沖縄平和祈念堂トピックス

### ★沖縄福祉文化を考える会三行の来堂

11月14日、沖縄福祉文化を考える会（佐久本真智子会長）二行11人が沖縄平和祈念堂に訪れた。同会の年間計画における「屋外学習」の一環として、会員で当協会の嶋田玲子理事の案内で訪れた。一行を当協会新垣昌頼専務理事が迎え、山田真山画伯と沖縄平和祈念像について説明を行った。



沖縄福祉文化を考える会のみなさん

### ★戦後80年長崎・沖縄平和祈念コンサート

コンサート

11月30日、戦後80年長崎・沖縄平和祈念コンサート（同コンサート実行委員会主催）が開かれ、1000人余の聴衆が沖縄平和祈念堂に訪れた。このコンサートは長崎の被爆者らでつくる

長崎・被爆者歌う会「ひまわり」の皆さんを迎え、糸満高校（コーラス）の生徒と女性合唱団スエール他の皆さんが出演した。「ひまわり」は、歌の語り部として原爆の被害や恐怖を伝えていく合唱団で、核廃絶がテーマの「もう二度と」を含む6曲、糸満高校の生徒はひめゆり学徒隊にまつわる「別れの曲」、合唱団スエールは「月桃」などを披露した。最後は聴衆も一緒に「長崎の鐘」と「芭蕉布」を歌った。



戦後80年長崎・沖縄平和祈念コンサートのようす



★沖繩平和祈念像「浄め」

12月18日、平和祈念堂恒例の沖繩平和祈念像「浄め」が行われた。この浄めは、毎年大晦日の夜から元旦にかけて開催する「摩文仁・火と鐘のまつり」と新年を迎えるに当たって行われるもの。今回は沖繩バス(株)・東陽バス(株)のバスガイド指導員6人、うらび運営企業関係者1人、米軍基地内高校生1人、沖繩県立芸術大学留学生4人、そして平和祈念像の制作に従事した糸数政次さん(当協会理事・浦添市美術館長)に当協会役員・関係者6人とあわせて19人で行った。参加者と役員は戦没者慰霊と世界の恒久平和を祈り、高さ約12メートル・幅約8メートルの平和祈念像の埃を払い浄めた。また、各団体から奉納された折り鶴や平和宣言などの整理を行った。糸数さんには、作業とあわせて平和祈念像上部の表面に塗られた漆の状態も確認してもらった。



沖繩平和祈念像「浄め」

★第48回「摩文仁・火と鐘のまつり」

12月31日から2026年1月1日にかけて第48回「摩文仁・火と鐘のまつり」を開催した。この行事は、1978年の沖繩平和祈念堂開堂の年より実施している。当日は約4000人が参加し、去りゆく沖繩戦後80年の年をふりかえり、新しい年の世界平和を誓った。まつりは午後10時の開会式から始められ、参加者が一体となつて恒久平和を祈る厳粛な場として進められた。クライマックスでは、参加者が持ったいまつの灯りで幾つもの円陣を描き、午前0時を前にして破名城律子さんの清らかな祈りの歌「沖繩平和祈念像讃歌」が献唱された。そして、新年の訪れとともに平和の鐘が鳴り響き、同時に代表7人が円陣中央の大聖火台に平和の火を灯した。続けて、参加者全員で新年を祝う歌曲を合唱し、聖なる炎と鐘の音が織り成す祭典を終えた。



まつりのようす

協会関係事業他募集案内など

★第34回金城芳子基金募集案内

【金城芳子基金】は、沖繩女性の地位向上のために献身された金城芳子さん(1902～1991)の強い意志により、そのご遺族によつて1992年に当協会に設置され、沖繩女性のため、社会的に意義のある活動や調査研究を行う個人及び団体・グループに助成している。

第33回までに33の個人・団体に助成を実施した。第34の応募締切は2026年3月31日。当日消印有効。

★2026年度沖繩青少年勉学支援生募集

2026年度沖繩青少年勉学支援生の応募受付を4月1日から開始する。支援金額は24万円(年額)。締め切りは6月30日まで(当日消印有効)。応募希望者は、本会ホームページの「事業内容」から「沖繩青少年勉学支援制度」へ進み、申請書をダウンロードしてA3サイズでプリントアウトし、必要事項を記入のうえ必要書類2点(在学証明書・在職証明書を添付して左記の住所へ郵送。7月に行われる審査委員会において、当該年度の勉学支援生を決定する。

【申請書の送付先】

〒103-0001  
東京都中央区日本橋小伝馬町17-6  
シエスタ日本橋 201  
(公財)沖繩協会 沖繩青少年勉学支援担当宛

写真で見る戦前の首里城 Vol.3

沖繩協会には、沖繩関係図書約5,800冊を所蔵する資料室(沖繩平和祈念堂管理事務所二階)があり、その中に『沖繩記録・写真集』1939(昭和14)年4月・5月撮影(撮影者不明)が収蔵されている。2026年の秋に復元を予定している首里城正殿にちなみ、その写真集から戦前の首里城とその周辺をシリーズで紹介する第三弾。



正殿



北殿



南殿



正殿・唐破風向拝柱側面

